

【講演録】歴史系企画展「生誕一六〇年 清澤満之の世界展」
記念講演会 「清澤満之とその時代」

講師：岩田 文昭氏



P1 清澤満之

本稿は、二〇二三年七月七日から八月二七日まで、碧南市藤井達吉現代美術館で開催された歴史系企画展「生誕一六〇年 清澤満之の世界展」に関連して行われた記念講演会（主催・碧南市藤井達吉現代美術館、令和五年七月九日午後二時から三時三〇分まで、於西方寺本堂）の口述記録である。

講師は岩田文昭氏（大阪教育大学教授）、講演後の進行については、コーディネーターとして名畑直日児氏（真宗大谷派教学研究員）にお願いし、一四三名の聴講者があった。なお、講演録の掲載にあたっては、語調を整えるなどの編集を行った。

今日は、「清澤満之とその時代」というテーマでお話をさせていただきます。

現在、向かいの藤井達吉現代美術館で、たくさん貴重な品や写真が展示されています。今回の講演の主旨ですが、展示物を手掛かりにして、清澤満之さんとその満之さんを取り巻く時代状況を示すことにあります。満之さんが生きた時代というのは、西洋と東洋という二つの異なった伝統がぶつかり合う激動の時代でした。清澤さんは、そこにおいて浄土教の宗教的な生命を新しい時代に蘇らせる、そういったことに心を砕かれた方です。

満之さんには二つほど大きく特徴があります。一つ目は、自らの思想を仏教や真宗教学の伝統的な言葉を使わずに、当時において非常に新鮮な、自分の言葉によって表現をしたこと、二つ目は、自分の思想の根拠を、教団の権威でなく「実験」、実際に自ら経験したこと、体験したこと求めたということです。

こういった特徴に関しましては、これまでも立派な先生方が詳しく深く研究されてきました。今日もそういったことを踏まえて話をいたします。ただし、今日の話の中では、とくに、日本が西洋文明を一方的に受動的に引き受けたのではないことを強調したいと思います。当時の世界全体において新しい精神状況が生まれつつあり、西洋文明からも従来の思想・宗教とは違うものが求められており、清澤さんはこのような新しい社会の求めに応じて登場したのだということについてお話をしたいと思っております。

1）徳永家家族写真

（スライドの写真を示しながら）これは、徳永家ですね。清澤さんは元々尾張の徳永家に生まれました。こちらは美術館に展示されていた名古屋の土地図ですが、ここに建中寺という大きなお寺があって、ここにあるのが黒門町の清澤さんが生まれた場所でした。ここに清澤さんが勉強した情妙寺さんがあって、覚音寺さんがここにあります。

清澤さんは、武士の生まれで、非常に儒学というものを身に付けていたと言われております。これ（P2）は少し後の時代に、清澤さんが書いた『有限無限録』です。ここに書いてあることから、宋学（朱子学）の教養というものが非常に深く、儒教の精神というものが身に付いていたと言われています。その後、京都にある育英教に行って、真宗の僧侶として勉強したわけですけども、その根幹には儒教の素養というものが深くあったのです。

2）改正愛知県名古屋明細図

さて、これ（P3）は名古屋の明治初期の絵図です。これが名古屋城、建中寺はこの地図で言うと、東の端にあります。黒門町というのはこちら辺にあります。名古屋城を中心にして、東の端に徳永さんの家はあったわけです。お城の中心には上級の家臣が住んで、端の方は下級武士が住みます。黒門町はそういった下級武士が住むところでした。そして、こちら辺にあるのが、筒井小学校です。筒井小学校には「須く自己を省察すべし 大道を見知すべし」という清澤さんを顕彰する立派な碑があります（P4）。この小学校は、清澤さんが通った明治初期の第五仮義校の後身にあたります。

3）愛知英語学校全景

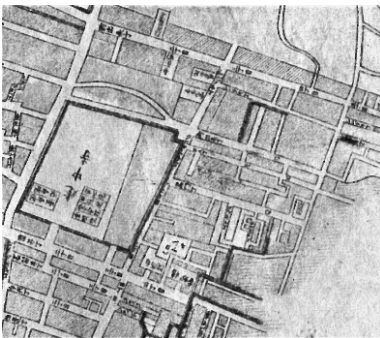
こういったところで清澤さんは勉強し、続いて今の旭丘高校の前身にあたる愛知英語学校で英語を徹底的に勉強しました。しかし、家は下級武士で、勉強がしたいものの明治以降は裕福ではありませんでした。そして、お母様が真宗の熱心な信者であったということから、真宗のお坊さんになれば勉強ができるということで、真宗のお坊さんになられたというのが、清澤さんが浄土真宗の世界に入られたきっかけだったのです。

4）満之のヘーゲル受容

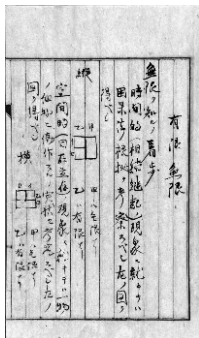
こうして、育英教で勉強し、それから東京大学の哲学科に入りました。ここでは外国人教師とともに勉強をしました。英語で先生が授業するので、英語ができないとノートを取れない、しかも今と違って、参考書なんかほとんどなく、あるにしても英語の本です。そのため、英語が本当にできないと卒業はできないという、今よりも数段難しい状況だったのです。



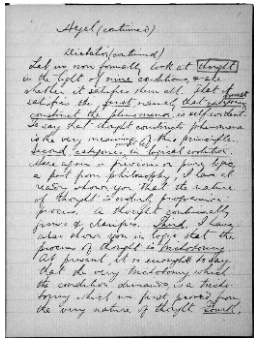
P4 筒井小学校内にある
清澤満之師碑



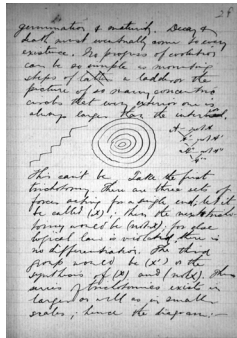
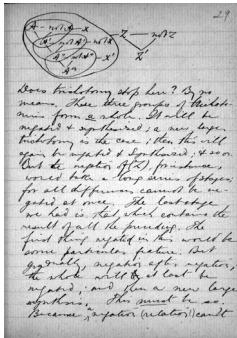
P3 名古屋の明治初期の図



P2 『有限無限録』



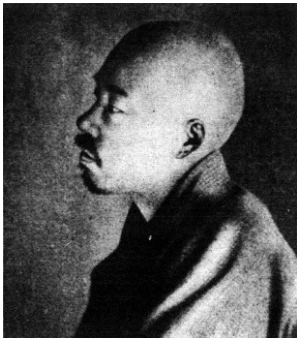
P5 フェノロサ講義ノート



P6 弁証法の説明を図にしたもの



P7 井上円了



P8 正岡子規



P9 夏目漱石

い学校でした。

その中で出会ったのが、フェノロサという外国人の教師です。フェノロサは岡倉天心と一緒に日本中を回って、法隆寺の夢殿の観音像を開帳させたなど、美術史で有名な方ですが、フェノロサは日本にやってきて哲学を教えました。この当時までの哲学は、主にイギリスの哲学で、フランスの哲学も若干ありましたが、ドイツのカントやヘーゲルのような哲学で本流と言われるようなものをきちんと教えた人はいなかったのです。

フェノロサは、アメリカのハーバード大学の学部・大学院を出た後、東大に来て、英語で授業を行いました。これ（P5）は美術館でも展示されている清澤さんのノートです。先ほど申したように、英語での授業ですから、英語でこのようにノートを書いたわけです。清澤さんだけでなく何人も何人も学生がいたわけですが、清澤さんのノートは抜群によくできているそうです。

こういうふうにしてドイツの哲学というものを本格的に導入したのがフェノロサであって、清澤さんはドイツの哲学というものを学んだ最初の学生のひとりであったのです。

ヘーゲルの哲学というのは大変難しいのですが、その哲学の根本にあるのが弁証法の思想です。清澤さんのノートには弁証法の説明を図にしたものが描かれています（P6）。このような弁証法の図は、今は高校生の倫理の教科書や参考書にも載っていますが、実はこういう図はヘーゲルのテキストには出てこないそうです。ではどこから出たのかというと、まず間違いなくフェノロサの講義からだと言われています。フェノロサの講義で、ヘーゲルの考えを日本人に伝える時にこういう図を使い、それが清澤さんを介して日本に広まっていたのです。

このようなドイツの哲学、当時の先端の哲学を日本で受容して、それを知らしめた点に、清澤さんは非常に大きな力を発揮したわけです。

フェノロサの講義を聞いたなかには、井上円了（P7）という人もいました。清澤さんの少し先輩で、先に東大に入りました。元々は浄土真宗のお寺の人で、今の東洋大学を創立した人ですが、この井上円了なども哲学を勉強して、東洋大学をつくった人です。

次に紹介するのは正岡子規（P8）さんです。日本の俳句というものを新しく興した松山の人です。美術館には、「病床六尺」についての展示がありました。正岡さんが病氣になって非常に苦しんでいたときに、清澤さん、あるいはその周辺から手紙が届いたということが紹介されていました。ちなみに、正岡さんは大変優秀で文章も達者なのですが、東大で落第しています。数学の授業の試験で落ちたのですけれども、数学ができないから理解力が劣るのかというと、そうではないんですね。数学が難しいのはさておいて、教師がそれを英語で教えるからより難しかったのです。正岡さんはちょっと英語が苦手だったので、高等数学を英語で教えられるとなかなかついていけませんでした。そういう

ふうにこの当時の学問のレベルというのは高かったということです。

正岡さんが出ましたので、正岡子規と親しかった夏目漱石（P9）さんについても触れたいと思います。夏目漱石の有名な作品に『こゝろ』というものがあります。その中で、先生という主人公と、Kという先生の親友が出てきます。このKは実は真宗のお坊さん出身だと書かれていて、Kは清澤満之さんをモデルにしているというのが有力な説です。もちろん、モデルですから、全部が同じではないのだけでも、非常にいろんな点が似ているといわれています。

夏目漱石も東大出身の人で、先輩に清澤という人がいて、大変優秀で、お坊さんだということが漱石にも伝わっていたと思います。ですので、清澤満之さんをモデルにしているだろうと言われています。もし、『こゝろ』を読まれるときには、もちろん事実と違うところはたくさんありますが、そういうことをイメージして読まれると、新しい読み方もできるのかなと思います。

こういうふうに清澤さんは東大で勉強され、非常に優秀でした。ここで次のこの写真（P10）についてお話したいと思います。これはフェノロサのお墓です。フェノロサのお墓は園城寺（三井寺）、比叡山の東側にあるお寺にあります。フェノロサはアメリカ人で、最後はイギリスのロンドンで亡くなったと言われています。その方のお墓がなぜここにあるのでしょうか。実はフェノロサは仏教徒でした。真宗ではありませんが、受戒して仏教徒になった人です。亡くなった後、遺骨をここに運んで、安置しているわけなのです。

では、なぜフェノロサは日本にやってきたのでしょうか。フェノロサはアメリカの生まれですが、両親はスペイン系の人です。スペインは、キリスト教のカトリックの国ですが、アメリカにやってきてから、プロテスタントになりました。そういうなかでフェノロサは生まれましたが、早い段階で母さんが亡くなり、お父さんが再婚をして、その後というわけか、自殺をされてしまいました。フェノロサは勉強ができましたので、ハーバード大学を出ましたが、スペインからの移民出身で、しかも両親もおらず、コネもないために就職しようと思っても就職できませんでした。また、当時、結婚もしようと思ったのですが、お金がないので結婚もできない状況にありました。そういう時に、日本の大学、東大で教えれば、たくさん給料もらえると教えられ、日本にやってきたわけです。

だが実は、お金だけの問題だけではなかったようです。フェノロサという人は、アメリカ時代からキリスト教に対して非常に批判的で、キリスト教が本当に正しいのかという気持ちがあったようです。フェノロサは、日本にやってきて七年目に、ビゲローというお金持ちの医師で美術家の人と一緒に受戒をしました。誰から受けたかというところ、三井寺法明院の桜井敬徳というお坊さんでした。お墓が三井寺の境内にあるのはこのことに関係します。東京国立博物館の初代館長であった町田久成のところに、桜井敬徳が来まして、説教を受け受戒をしました。そして、フェノロサと一緒に日本国中を回った岡倉天心も同じように仏教徒になっていたのです。



P10 フェノロサの墓

フェノロサが日本にやってきたのは、もちろんお金目当てということはあるのですが、おそらくそれだけじゃない。スペインの移民の子として生まれて、お父さんが亡くなり、次第にキリスト教というものに対して疑いをもっていったというのが、すでにアメリカの時にあったようです。日本にやってきたというのは、これまで知っていた文明の国ではなく、知らない異国の地に行って、何か精神的なものを求めようとしたということが考えられるわけです。

フェノロサは日本に来て早々に痛烈にキリスト教の批判を行い、これを仏教徒は大歓迎しました。江戸時代までは、仏教は幕府の保護によって、檀家制度があつて安定していました。ところが、明治になると、仏教と神道は分離しろという神仏分離令が出ました。神道の方は割と優遇されたけれども、仏教の方は優遇されない。そのなかで、科学が入ってくると同時にキリスト教が入ってきて、神父や牧師が一生懸命宣教する。日本の方はずっと鎖国をしていたから、文明が遅れていると自覚せざるをえない。仏教徒の方も、少しコンプレックスがあつて、キリスト教に負けてしまいかもしれないと思つていた時に、アメリカからやってきた、ハーバード出身の秀才がキリスト教の批判をしました。そうすると、これは大変仏教徒にとって嬉しいわけです。

こういう背景のなかで、東大の学生であつた井上円了や清澤満之にとって、哲学を勉強するということは、単にヨーロッパの学問を勉強するというだけでなく、キリスト教に対抗できるような思想が学べるのではないかという期待があつたのではないかと思います。

いずれにしても、フェノロサは痛烈なキリスト教批判を行いました。また、浄土真宗本願寺派の赤松連城という人とも議論をしました。赤松さんは仏教一般をよく知つておられて、仏教の空仮中の三諦、仏教の根本の真理で非常に難しい真理ですけども、そういった仏教の根本的真理と、ヘーゲルの弁証法（正反合の論理）というのが非常に似ていると言いました。フェノロサに赤松さんが学識をもとに説明すると、フェノロサは仏教というのはヨーロッパの哲学、ヘーゲルに匹敵するようなものがあるのかと感心したと言います。

そのとき、本地垂迹説という、阿弥陀様がいて神様がいるというような説も説明しました。これは、根本的な原理があつて、そこからいろんなものが現れるという思想だと赤松さんが説明すると、フェノロサは仏教というのは非常に高等な宗教であつて、キリスト教とは違う、哲学的にも意味がある、そういう宗教だと言つて、縁があつて、天台宗のお坊さんから受戒を受けて仏教徒となつたわけですね。

その後、フェノロサはアメリカに帰るのですが、シカゴ万博の万国宗教会議というものに参加します。世界中の宗教者、キリスト教徒以外の宗教者、仏教者のインドやスリランカのお坊さんにも来てもらおうという、そういう会議にも参加をしている。つまり、キリスト教以外にも、いろんな宗教があるということを考えた人だったのです。

そして清澤さんの晩年ですけども、フェノロサが東大からヨーロッパ、アメリカに帰つた後、清澤さんは苦心して

運営した真宗大学に、もう一度、フェノロサに来てもらおうかということを佐々木月樵さんに何度も言つたそうです。これは、フェノロサが単に学者として優れているというだけでなく、やっぱり仏教徒であり、新しい学問と共に、仏教を興隆するために来てほしいと考へたというふうに推測されるわけです。

ここでのポイントは、清澤さんをはじめ、日本人がフェノロサからヨーロッパの哲学を学んだ、受け身でヨーロッパ文明を自分のものにしたというだけではなくて、ヨーロッパ人のなかにも日本の思想や仏教を学びたいという動きがあつたということです。フェノロサはアメリカにいた時にはおそらく仏教を知らなかつたと思いますが、日本にやってきてそれを学びました。仏教に求めたのは、キリスト教でもなく科学でもない、第三の精神的な欲求に合うようなものです。そういうものを求めていた人が少なからず欧米人にもいたわけです。そういうなかで、清澤さんのような、新しい学問を持った人、新しい宗教的な命を吹き込むようなものが生まれたのです。ヨーロッパ人が求めているようなものを日本人も打ち出していったのだということが一つのポイントになるわけでございます。

5) オルコット来日と通訳

同じようなことをもう一つ申します。オルコットという神智学協会の初代会長がいます。アメリカで生まれて、南北戦争の時に陸軍の大佐になった人で、神智学というちょっといかがわしい団体の会長でしたが、仏教を新たに盛り上げるのに大変な貢献をしました。仏教との公式な対話を行つた最初の欧米人と言われます。インド、スリランカに行つて、仏教徒と話をして、仏教徒にもなつた人です。

オルコットはスリランカで在家の信者として受戒をして、スリランカの仏教改革者、ダルマパーラという人に大きな影響を与えて、仏教の復興を実現させ、新しい近代的な仏教を誕生させました。これはどういうことかと申しますと、インド、スリランカは当時植民地です。つまり、イギリス人によって、近代文明によって、インド人やスリランカ人が抑えられて、キリスト教の布教というものが行われていました。

インド人もスリランカ人も、キリスト教徒になつた人もいるし、近代科学だけで生きていこうという人もいますけども、やっぱり面白くない。その中で、アメリカからオルコット大佐が来て、仏教というのは非常に精神的に意味があるということを言つたわけです。そうしますと、インド人もスリランカ人も、仏教は現代でも意味があるのかなと、こういうふうに非常に励まされました。その中で、特にダルマパーラが、スリランカで近代仏教の立て直しをしたというわけです。

このダルマパーラという人は、日本にもやってきました。一八八九年、ダルマパーラとオルコットが日本にやってきたのですが、この時はほとんどの仏教の宗派が大歓迎しました。さっき言つたように、仏教徒はキリスト教に負け

ているのかとコンプレックスがあったところに、仏教に帰依した人がアメリカからやってきたので大歓迎をしたわけです。京都の知恩院の立派な本堂で、二千人を超える聴衆があったと言われる大変な大歓迎でした。

そこで通訳をしたのは、平井金三と佐久間信恭という英語がよくできることで有名な人たちです。その二人とともに、当時は徳永という姓だった清澤満之さんが通訳をしました。これはこれまでのほとんどの伝統的な仏教の研究や清澤さんの研究では、ほんの少し触れているだけで、あまり評価されていないことです。それはオルコットと神智学協会というのはいかがわしく、仏教とは違うということがある段階でわかったからです。ともかく、最初にオルコットが来た段階ではすごく盛り上がりました。日本は大乗仏教の国ですけども、上座部のスリランカの仏教というもので、そして神智学というちょっとよくわからない欧米の思想とがここで出会ったわけです。

キリスト教の布教というのがとても盛んになっている中、オルコット大佐が来ることで、仏教徒も団結できるのではないかと、いや、団結しなければ負けてしまうぞという、仏教徒の連帯、「通仏教」という概念が非常に広まりました。各宗派、本当に仲良くやろうというような、そういう「日本仏教」というものが新たに盛り上がりを見せたのです。

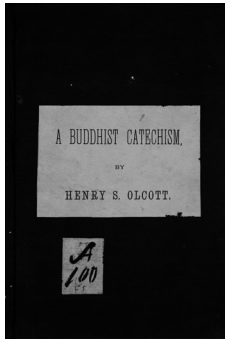
つまり、欧米からの精神的な刺激によって、日本の方も盛り上がりつつあります。オルコット大佐がスリランカで仏教を革新したように、日本もここで大きなインパクトがあったわけです。

五、六年前、清澤満之記念館にある満之さんの蔵書を拝見したことがあるのですが、その中にオルコットの本The Buddhist Catechism (P11)もありました。満之さんは英語もできるし、仏教もわかっていますから、ここはおかしいなど注を入れたりもしていますが、こういったオルコットの本が日本で出回ったのです。仏教復興にたいへん貢献をしたオルコット大佐が、仏教には意味があるよという本を出したので日本でも大歓迎されたのです。そして、この本には、釈迦の生涯とか法とか、教団とは何かという仏教の基本的な教義が示され、釈尊の教えを現代社会にどう適合させるかも扱っているのです。

要するに、アメリカの大佐がインド、スリランカにやってきて、仏教の教義体系を上手にまとめてくれたのです。それをスリランカでも、日本でも喧伝したので、仏教者は、非常に刺激を受けたわけです。

神智学協会というのは、オルコット大佐とともに、ブラバツキー夫人を中心に創設されました。オルコット大佐は実際に伝道をしたが、ブラバツキー夫人は、神智学協会の思想的柱を構築しました。生まれはウクライナで、ウクライナというのは、ヨーロッパとアジアの中間にあるわけです。そういうところで生まれて、ロシア人と結婚して、ブラバツキー夫人となって、神智学協会をオルコットと創設したのです。

彼女は、科学だけでは人間は幸せにならないとして科学批判をするとともに、キリスト教の誤りも指摘しました。つまり、キリスト教と科学・唯物論を両方批判したのです。フェノロサとはちよつと違う点がありますが、欧米人と



P11 オルコットの本

して、キリスト教でもない、科学でもない、そうでないものを求めたという点で共通するものがあるわけです。ブラバツキー夫人は、もともとは心靈主義を実践していました。心靈主義とは人は肉体と靈魂からなり、肉体が消滅しても靈魂は存在し、現世の人間が死者の霊と交信できるとする思想です。ブラバツキー夫人は、最初は自分にも霊が乗り移る霊媒として、死んだ人と話ができるという思想を実践していました。しかし、ある段階でそれ以上に、もっと靈的な世界があるのだと主張するようになったのです。そして、ブラバツキー夫人は、キリスト教以前に、キリスト教とは違った、西洋にもいろんな深い思想があるのだと考え、さらに西洋と東洋の智の融合や統一についての思想を展開したわけです。

ブラバツキー夫人の思想は相当の影響がありました。仏教が日本から欧米に伝わる時に、神智学でブラバツキーなどが仏教はなかなかいいということを言っているからということで、仏教を歓迎した人に影響を与えたのです。神智学は、日本の仏教者から仏教を学ぼうとする欧米人の方の受け皿を作る一翼を担ったのです。

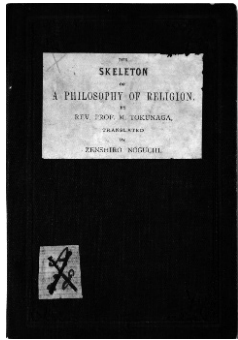
つまり、ヨーロッパにおいて、キリスト教は間違っており、しかし技術や科学だけでは不十分であり、チベットや日本やインドやエジプトなど、精神的な世界に目を向けるべきだということを、非常に影響力を持って言ったのがブラバツキー夫人という人でした。人類が皆同じように、精神的な高い段階にいるべきだという人類共通の夢を、キリスト教でないレベルで言ったという点で、人氣があったわけです。

ただし、オルコット大佐が二回目に来たときには、神智学協会は仏教とは違う思想だということやそのオカル的な内容が知られることによって、日本の仏教界から歓迎を受けることはなくなりました。ただし、ここで重要なことは、日本が一方的に西洋から思想的影響を受けたのではなくて、この時代にはヨーロッパの方も、アメリカの方も、第三のものを求めているということです。そして、清澤さんもそういう精神的な運動に関わったということを申したいわけです。

6) シカゴ万国宗教会議

先程ちょっと申しましたが、シカゴ万国宗教会議が一八九三年にありました。ここには世界の宗教者を集めることになり、キリスト教だけでなく、仏教の人も呼ばれることになりました。日本からも、釈宗演や蘆津実全、平井金三など、禅宗の人や天台宗の人が行って、日本にはこんな仏教という宗教がありますよということを発表しました。

こういうふうにして、近代になって、キリスト教以外の宗教というものが、世界に色々ありますよと紹介されたのです。このようなイベントがあったということは、ヨーロッパ人もアメリカ人も、キリスト教以外のものを求めている



P12 “The Skeleton of a Philosophy of Religion.”

る人が一定数いたことを示しています。その人たちがキリスト教以外の何かを求めたいと思っていたことを背景に、
こういう万国宗教会議というものが成立したのです。

そして、そこで満之さんもデビュリーしているわけです。これはご存じの方も多いと思いますが、会議で『宗教
哲学骸骨』という、満之さんが一番最初に書いた大事な本が英語に翻訳されたもの（P12）が、紹介されています。展
示にもありましたけども、満之さんは英語ができますから、他の誰かが翻訳したものを違うと言って直している箇所
もあります。いずれにしても、世界デビュリーという言葉言い過ぎかわかりませんが、日本の仏教の代表の一人とし
て、新たな宗教世界を欧米に向けて提示したわけです。

シカゴ宗教会議に大きな意義がありました。キリスト教というものが唯一絶対とされていた中で、アジア、特にイ
ンドから発した靈性、キリスト教とは違う、スピリチュアルなものとがあると、欧米でもある程度受け入れられるようになっ
たということですね。ですから、満之さんの『宗教哲学骸骨』も、そういった世界が求める背景のなかで、日本の代
表の一人として出ました。単なる受け身ではなくて、世界の潮流の中で、日本の方から能動的に打って出るというこ
とになったのです。

7) 満之の宗教哲学骸骨

満之さんの『宗教哲学骸骨』というのは、宗教とは何かということを、真宗の言葉ではなくて、哲学の言葉で語っ
ています。宗教を有限と無限との関係で表現しています。こういう言い方は現在ではそんなに不思議ではないですが、
それまで阿弥陀様などの仏教のチームで言っていたこと、絶対と、有限と無限という哲学的なチームで言い直したわ
けです。満之さんは、自力門と他力門と二つのタイプがあると仰いました。まず「自己のうちの因性を開発して、無
限に到達せんとする」と述べられます。仏教での言い方をするならば、人間の心の中には、仏性（仏になる心）がある
から、それに気付くことが仏になることだということになります。しかし、そういう言い方をせずに、自己のうちに
あるものを元にして無限に到達せんとするということふうに、近代的な言葉で言い直しました。

他力門というのは、阿弥陀様に救われるということですが、それを「有限の外にある果体としての無限が、有限を
摂引して、無限へと到達せしむる」と、フェノロサから学んだような哲学の言葉を使って、世界に通じる言葉で表現
するのが満之さんの基本的な立場でした。

8) 自己の生活の場での実験

このように、満之さんは浄土教を哲学的に説明していますが、さらにそれを自分自身の生活の場で確かめる「実験」
をすることをしました。単に頭で考えるだけではなくて、自分の中で浄土教というものを身につけるということをし、
満之さんはしていました。その時に、エピクテタスという、元々は奴隷だったローマの哲学者の語録を読んで、自分
の中で浄土教を実験するという経験をしていくわけです。

満之さんはこの経験をノートに残していますが、「外他なるもの」の徹底的認識をエピクテタスから学びました。「外
他なるもの」は相対有限な事物の総体であり、それを「如意なるもの」と錯覚することにより、それに縛られ煩悶憂苦
に陥る。それゆえ、如意なるものと不如意なるものとを明確に区別し、不如意なるものを自己の領分の外に排除しな
ければならない。つまり、自分の中で思うようになることとならないことがあると、だから思うようにならないこ
とは、もう自分とは関係ないのだと、そういうことをエピクテタスから学んだということです。

当たり前ですけど、どんな人間でも思い通りに人生を生きられません。そういうなかで、思うようになることと、
ならないことと、そういうものを区別して、思うようにならないことは、自分の外に出さなければいけないと。

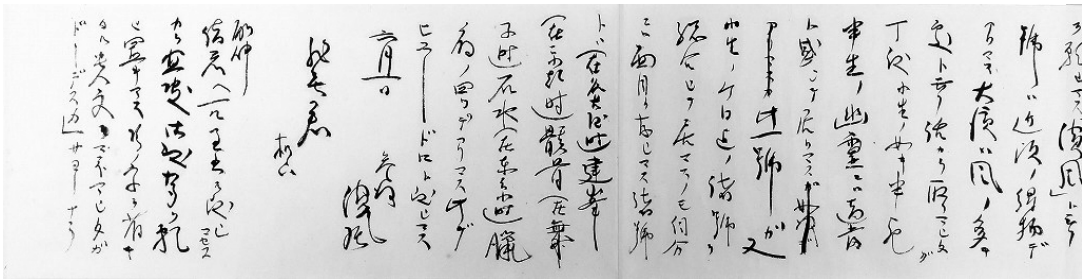
エピクテタスは、こういうことができたのですが、ただし満之の考えとはちよつと違いがあります。エピクテタス
は、自分の意志力によって、自分の思い通りになるものと、思い通りにならないものを切斷するとします。これは、
私の理解では、自力門ですね。つまり、自分の心の中にあつて、自分が思うようになるものは自分のものとする、で
きないもの、自分に関係ないものは諦める。こういうことが自力門的です。

実は、これはエピクテタスの哲学的な内容なのですが、運命を諦念する自己は、神的な理性に参与する自己とし
ています。エピクテタスはストア派の流れに属しますが、自己の内なる神的ロゴスによって運命や死に対する勇氣
を持つと考えます。

できないものではないのだと、自分のものでないものは自分のものでないと、そういうふう言い切れる時には
ですね、神的なロゴス、仏教的な言い方をすれば仏性ですよ、そういう素晴らしい力があり、だからこそ、人間は
素晴らしいから、思うようにならないものは放棄しなさいと、こういうことを言っています。私の理解では、これは
自力門的な表現です。

しかし、満之さんは、如意と不如意の違いはわかったものの、自力門は取らない。満之の考えでは、神的な理性を
有する自己は破られ、如来の前において無なる自己、罪悪と無能なる自己が自覚される。無なる自己の自覚におい
て、外物は断念されるのではなく、如来つまり絶対無限によって自己に与えられたものと受け取られてくる。

これが満之さんの体験だと思います。自分の思うようにならないものについて、ある段階では自分の思い通りにな
らないものを諦めるようにするという、ストア派的な、エピクテタスのような考えを持ったにしても、そうじゃない。
これは自分の思うようにはならないのだ。それは、阿弥陀様という絶対的なものによって与えられているのである。



P13 暁鳥敏宛清澤満之書簡（複製、部分）



P14 清澤満之・稲葉昌丸・近角常観集合写真



P15 浩々洞同人集合写真

そういうふうには、この如意と不如意の区別、この問題が突破できるということをも自分の身において、体験できたのだと思います。

そういうことが満之さんの「絶対他力の大道」という言葉にあります。「自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗託して、任運に、法爾に、此現前の境遇に落在するもの即ち是なり」と。要するに、自分という存在は、やっぱり絶対的なものに乗るんだと。そうすると、自分が思うようにならない状況も落ち着くのだと、こういうことを、自分の実感として言われたのだらうなと思うわけです。

9) ヒュードロ 一九〇三年六月一日(逝去の五日前) 暁鳥敏宛書簡

こちらの写真(P13)は、満之さんの最晩年、死ぬ五日前に暁鳥敏さんに出した手紙です。これには色々書いてありますが、特に面白いところは、「これでひゅーどろと致します」とあるところです。私には、正直、想像を絶する言葉です。病気になって死にかかっているという状況になって、亡くなる五日前に弟子に「ひゅーどろと致します」と言うわけです。

自分の中で、絶対他力というものに乗託をするという、そういうことを表現しているのだと思うのですが、こういうことを、死ぬ間際に言うわけです。

宗教哲学骸骨においては、有限と無限と言って、自力門と他力門を説明し、その後エビクタスに会って如意・不如意の違いというものを説明し、最後、自分の中で阿弥陀さんの本願を受け取るということを、「本願」とか「阿弥陀」とか言葉を使わずにある種の境界を言ったということになります。本当に自分の中で体験されたことを言っておられる、こういう境界が満之さんの精神ですね。

10) 浩々洞と三羽鳥

展覧会には、他にもいろんなものがありまして、この写真(P14)の右上にいる、髭を生やしている人が近角常観という人です。この人が居った場所に清澤満之さんたちが住みました。この近角常観は、満之さんが二七、八歳で京都府尋常中学校の校長先生になったときの学生で、弟分として一緒に行動した人です。

近角がアメリカ、ヨーロッパに二年間行くことになり、その留守宅に住んだわけです。「浩々洞発祥の地」という石碑があります。東京の本郷、東大のすぐ横の、今は求道会館という建物があるところです。そこに、みんなで集まって、喧々譁々色々議論をしました。満之さんというのは、非常に議論が達者で好きな人だったそうです。弟子がいろいろ言っても、議論で論理的に対抗しまして、そこでいろんな人たちが寄宿しながら学んだという場所なわけです。

ここに浩々洞の写真(P15)があります。こちらが満之さん、この人は佐々木月樵という、いわゆる三羽鳥の一人です。三河の方で、安城の願力寺というところに誕生して、のちに岡崎の上宮寺というお寺に行きました。大変立派な学者だったそうです。満之さんの弟子には、立派な人が多いですが、この人は学者としては多分、図抜けているんじゃないかと思います。満之さんが運営した大学の教授になって、非常に拔擢をされて、欧米に、教育・宗教を視察しに行きました。大変優秀な人で、大谷大学の学長になった方です。この方は、『実験之宗教』という、自分自身が体験したような宗教でないといけないんだという、満之の思想を基にしたような本を書かれています。

次の方は多田鼎さんです。この方も三河の出身で、常圓寺で誕生しました。満之さんが発行した雑誌の『精神界』の編集を担当しました。彼は、若い頃は満之さんと一緒に生活していこうとしましたが、途中で満之さんが言っていることは、伝統的な浄土真宗の言葉ではない、だからもっと伝統的な言葉にしなければいけないのだと批判するようになりました。こういった、満之の死後に離れるような人も三羽鳥の一人としていたわけです。

三羽鳥の最後は暁鳥敏さんです。石川県の出身で、大変活発に運動された人で、世間的な影響力としては、この暁鳥さんの力は大きいものがありました。今日非常に有名になった『歎異抄』という書物は、清澤さんが非常に好んだわけですが、清澤さんが宣伝をしたということも、もちろんなくはないですが、実は暁鳥さんが非常にこれを取り上げていろんなところで広めたと言われています。

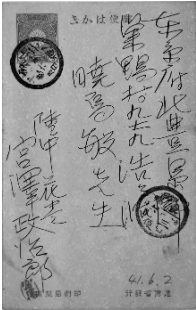
また、石川県の暁鳥さんの明達寺の中で、清澤先生の前に暁鳥さんが座っているという像があります。このように大変、清澤先生を尊敬していたわけですね。

暁鳥さんは非常に多く文章を書きまして、満之さんが死んでから、その思想を大きく広めました。戦後ですけども、晩年には、真宗大谷派の宗務総長になりました。このように非常に影響力があった弟子がいたわけです。

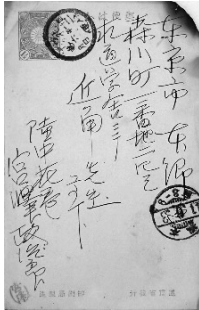
11) 宮澤賢治一家と暁鳥敏・近角常観

それから、あまり知られていないことですが、宮沢賢治とも関係がありました。宮沢賢治と清澤がどういう関係にあるかということが、ほとんど言われてなくて大変残念なのですが、間接的にですけども関係があります。

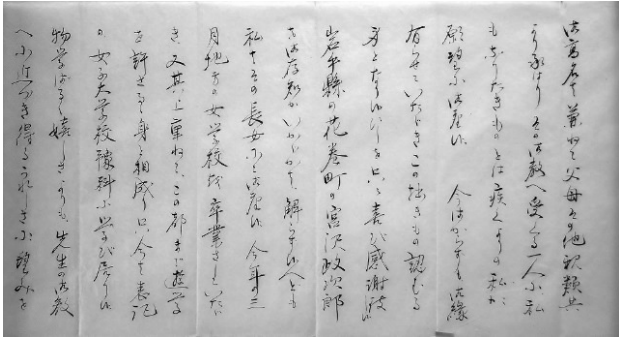
宮沢賢治のお父さんの宮沢政次郎は、非常に熱心な浄土真宗の信者でした。暁鳥敏や近角常観の講話を一生懸命に聞き、家族にも聞かせていました。政次郎は、岩手県の花巻の人でしたが、そこに暁鳥敏や近角常観を呼んで、講演会をしています。花巻の近くに大沢温泉といういい温泉があります。仏教青年会を作ってそこに集まり、昼は暁鳥敏や近角常観の話聞き、夜はお風呂へ行くということをしていました。ですから、宮沢賢治は間違いなく暁鳥敏の話を知っているのです。



P16 暁鳥敏宛
宮沢政次郎はがき



P17 近角常観宛
宮沢政次郎はがき



P18 近角常観宛 宮沢トシ書簡

この写真（P16）は、宮沢政次郎から暁鳥敏への手紙です。こちらの写真（P17）のように、近角常観にも葉書を出しています。このように、賢治は非常に熱心な浄土真宗の家庭で生まれたのですが、親子喧嘩をすることになります。父親の影響力からなんとか逃れたいという、そういう気持ちですね。賢治は法華経の教えを広めたいという考えがありました。

父の政次郎と賢治の対立は、浄土真宗と法華経の対立でした。なお、賢治の死後ですが、最後に折れたのは政次郎で、賢治の考え方に従おうとしました。ただ、賢治が浄土真宗に一定の影響を受けているのは間違いないですね。

こちらは宮沢トシという賢治の妹に関する資料です。トシは非常に優秀で、今の日本女子大学に花巻から進学します。東京に行くわけですから、女の子ということもあり、不安だったお父さんの政次郎は、近角常観に指導してくれるよう手紙を出しました。

この写真（P18）は宮沢トシから近角常観への手紙ですが、本当に綺麗な字で、頭が良くて優等生であったことがよくわかります。ところが、常観のところにいったものの、どうも自分は浄土真宗に馴染めないと書いた二つ目の手紙が残っています。

要するに、宮沢賢治の一家は清澤満之の弟子たちと深い関係にあったということです。法華経の影響も大きいですが、こういう環境を背景に賢治は育ち、その中で賢治の文学は成立したのです。

12 満之の墨蹟

さて、最後に展示されていた満之の書についてです。これ（P19）は「本来無一物」という禅宗の言葉ですね。浄土真宗の言葉だけでなく、自力門の言葉をこういうふうに書いておられます。人間は誰でも本来仏になる可能性があるという禅語だと思いますが、満之は浄土真宗で阿弥陀仏の本願によって生かされたのですが、本来無一物ということを決して頭ごなしに否定はしないのです。『宗教哲学骸骨』の考えにもあるように、自力門もある程度枠として取り入れたわけです。

こちら（P20）は、西方寺に掲げられている「一切群生蒙光照」ですね。西方寺の方々にはこういった正信偈の言葉を遺したということになりますね。

さて、このように清澤満之の一生を、展示品を中心にして話をしてきました。満之さんがどういうふうにして他力門というものを身につけたのか、また、フェノロサを中心にして、ヨーロッパやアメリカの方からも、満之のような教えというのを求めたことを話をしました。つまり、キリスト教や科学とは違う第三の精神的な文明を求める動きが

あり、それに呼応する一人が満之だったということをお話したかったわけです。

では、これにて終わりにしたいと思います。

【質疑応答】

（コーディネーター・名畑氏）

岩田先生、ありがとうございます。

御講演を聴かせていただきまして感じることは、浄土真宗は、本来、教団といった枠組みを超えて、一切衆生に開かれた宗教であるということ、そして清澤先生が出会われた教え、文化、精神というのは、そういう教団を超えており、その中で清沢先生自身がいかに救われるかということを求めておられたということです。このようなことを改めて痛感しました。

では、質疑応答に入りたいと思います。

（質問者1）

鈴木大拙と清澤満之には、何か繋がりや関係はありますか。

（コーディネーター・名畑氏）

アメリカのシカゴで開催された万国宗教大会の時に（一八九三年）、『宗教哲学骸骨』（英訳）が紹介されたのですが、その時、鈴木大拙がそれに関わっていました（福田正治「清澤満之の哲学と信仰」（黎明書房、一九六三年）参照）。ただ直接的な関わりについてはなかったのではないかと思います。

（講師・岩田氏）

そうですね、大拙も宗教大会には関係があったので、そういうところで大拙が満之を知っていた可能性は若干あるのかなと思います。

（質問者2）

清澤満之と文学者の繋がりに関して、夏目漱石の『こゝろ』に登場するKのモデルが満之ではないかという話を聞いたことがあります。夏目漱石と清澤満之の関わりについて、教えていただきたいです。

（講師・岩田氏）

藤井淳氏の論文に詳しいので、そちらによりますと、東大出身の真宗の僧侶であること、Kが家族問題に悩んだと



P20 「一切群生蒙光照」



P19 一行書「本来無一物」

いう記述がありますが、清澤も徳永家と家族問題に悩んだというところから言われています。また、非常に禁欲的に生きたという人物像も清澤に重なることです。ただし、モデルですから、ちよつと違うのじゃないかなというところがありますが、漱石が執筆するときに、清澤を念頭に置きながら、作品の中に織り込んだのかなと考えています。

（コーディネーター・名畑氏）

夏目漱石とは直接出会ったということはないと思われます。ただ、同じ時代を生きて、同じ時代の苦悩を感じたということ、そういう精神的な繋がりはあると言われています。

（質問者3）

明治の頃、岡倉天心がインドに行った時、ヴィヴェーカーナンダと出会っていることや、宗教会議をきっかけにして鈴木大拙も神智学に触れたり、ヴィヴェーカーナンダの影響を受けたり、当時このヒンズー教的な部分で仏教になり入っているのではないのでしょうか。

鈴木大拙の『大乘仏教概論』という初期の英語の著作などを観ると、在来の仏教と違う部分がかなり見られますが、その辺りで清澤満之や西田幾多郎とはかなり対立したのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

（講師・岩田氏）

今言われたように、鈴木大拙は、一般に仏教の大家とされていますが、とくに若いころ、実は神智学、あるいは、ヒンズー教の影響の強い著作を書いていたわけですね。ここからは意見が分かれるところですけども、私は、清澤はもちろん伝統的な仏教や親鸞の精神は受け継いでいると思いますが、その中にいろんなあの時代の精神というものが混じっている、親鸞の精神を受け継ぎながらも伝統的な仏教とは違う要素が入っていると考えた方が自然じゃないかと考えています。

西田幾多郎は禅を熱心にした人ですけども、西田の仏教理解というのは、非常に鈴木大拙に依っているとされています。そして、鈴木大拙の仏教というのは、それまでの時代の仏教をストリートに受け取っているかという、必ずしもそうではないわけです。だから、その混じり具合をどう理解するのかということが、人によって評価が分かれるところだと思います。私自身は、伝統は大事ですし、親鸞や道元の思想も大事なだけでも、その当時のことを語る時には、その時代のもが入っても致し方ない、いや、そういうものを入れないと、なかなか自分自身の心や現代人にはピンとこないのかなというふうに理解をしています。

（コーディネーター・名畑氏）

本来の仏教とか、本当の宗教や真宗とは一体何なのかと言う時、そこには時代性や歴史性というものが介在しているということがあります。最新の研究を踏まえたご質問をありがとうございます。

では、時間になりましたので、質疑応答を終わりたいと思います。本当にありがとうございます。

【講演者略歴】 岩田文昭氏

一九五八年名古屋生まれ。東海中学・高校卒業。京都大学文学部哲学科（宗教学）卒業。同大学大学院文学研究科博士課程満期退学。一九八六～八七年ルーヴァン大学高等哲学研究所留学。京都大学博士（文学）。専攻は宗教学・哲学。現在、大阪教育大学教授。著書に『フランス・スピリチュアリズムの宗教哲学』（創文社、二〇〇〇年）、『近代仏教と青年』（岩波書店、二〇一四年）、『浄土思想』（中公新書、二〇二三年八月刊行）など。

【画像出典】

P 1・2・5・6・11・12・14・15・20	西方寺蔵	P 9	『漱石全集 第八巻 行人』漱石全集刊行会、一九二九年（国会図書館デジタルコレクション）
P 5・6	「哲学史」第七号　ヘーゲル氏哲学」	P 10	園城寺法明院境内（岩田文昭氏撮影）
P 11	“A Buddhist Catechism”	P 13	複製…西方寺蔵（原本…明達寺蔵）
P 3	「改正愛知県名古屋明細図」（部分） （名古屋市政資料館蔵）	P 16	金沢大学附属図書館（暁烏文庫）蔵
P 4	名古屋市立筒井小学校内	P 17・18	求道会館蔵
P 7	東洋大学井上円了記念博物館提供	P 19	個人（碧南市）蔵
P 8	藤川忠治『正岡子規』山海堂出版部、一九三三年 （国立国会図書館「近代日本人の肖像」）		

【本稿編集】豆田誠路・日置麻里・加藤有美（碧南市教育委員会文化財課学芸員）